阿蘇北中学校だより

兜岩

No.7
平成22年10月7日
阿蘇北中広報誌係
文責 小原 宮本 西村

「リスペクト」の実現

校長　麻生 廣文

九月十一日。すばらしい天気に恵まれ、第五十一回目の体育大会が始まった。かけつけた保護者や地域の方、来賓に囲まれて入場行進が始まり、その後、赤・青・黄団の戦いの火ぶたが切って落とされた。

生徒会の今年度の大会テーマは「リスペクト」。「尊敬」「敬意」といった意味がある。その気持ちが自分に向けられると「自尊心」になる。生徒たちは、周囲の方々や本校に対する尊敬・敬意の気持ちを表現すること、自分に誇りを持てるまでやり通すこと、このような気持ちで体育大会に臨んだのである。

午前中から競技や演技が白熱し、午後にかけて次第にボルテージが高まっていく。そうして、全校生徒一体となった感動のフィナーレを迎える。本校の校訓「礼・学・体」の結実した一日であった。戦いの結果は黄団の総合優勝に終わったが、私が感動したのは、この大会までの彼らの頑張りであった。とりわけ、中学校最後の体育大会にかける三年生の熱い思いは、純粋さやひたむきさで際立っていた。夏休み中から、厳しい暑さと短い練習期間との闘いを繰り返していた。後輩をリードする上での焦りもあったろう。大会当日、その経過を思い浮かべると胸が熱くなった。だから、全生徒の一挙手、一投足に声援を送り続けた。

ところで、後日、体育担当の志賀先生が「校長先生、今年度の体育大会を漢字一字で表すと何になりますか。」と尋ねてきた。「尊」や「敬」などの字が脳裏をよぎったが、私は「達」の字を選んだ。「達」には、配達のように「届ける」という意味がある。まさしく三年生の「尊敬」「敬意」の気持ちは、一・二年生や地域・保護者の方、教職員にひしひしと伝えられていた。そして、感動の一日に遭遇した私たちは、しっかりとその思いが届いているのを感じた。

演技者にとって、努力や苦労の積み重ねをこれ見よがしに表現することは気が引ける。逆に、参観者にとっては、結果にのみ、ついつい目が向きがちになる。しかし、生徒たちはより速く、より美しく戦う中で、テーマに託した思いを、努力や苦労の痕（あと）をことさら語ることなく、さりげなく体現した。フィナーレの彼らの勇姿は、自らの目標を自己実現したことで得られる達成感に打ち震える尊い姿だった。

実り多き9月でした

「阿蘇郡市中体連陸上競技大会」男子優勝・男女総合優勝!!

9月28日(火)
あぴか

北中代表として出場した多くの生徒が優勝、入賞を果たし、男女総合優勝を成し遂げました。上位入賞した選手は 10 月 16･17 日 KKWING で行われる県中体連陸上大会に出場します。

なかよし運動会

9月25日(火)

三愛ﾚｽﾄﾊｳｽで行われ、交流学級の友だちの声援の中、ﾚｲﾝﾎﾞｰﾙｰﾑの子ども達が綱引きや大玉転がし等の競技に参加しました。

「少年の主張」熊本県大会優秀賞受賞!!

９月２５日（土）、八代市のハーモニーホールで行われた、第３２回「少年の主張」熊本県大会において、阿蘇郡市の代表で出場した３年３組の伊藤竜太朗くんが見事、優秀賞を受賞しました。

「お父さんの手」

一年　笹原　弥沙紀

私のお父さんは大工
木にかかわる仕事
だから
手には木のくずがささっている
そんなお父さんの手は
真っ黒で
ゴツゴツしていて
グローブみたいな
職人の手
この手で家を建てる
みんなが喜ぶ家
みんなが住みやすい家をつくる
みんなが笑顔で暮らしてほしい
と願いを込めて
お父さんの手は
人を幸せにする力がある
お父さんにはいろいろな顔がある
家族を大切に思うお父さん
仕事をがんばるお父さん
私たちとバレーの練習をしてくれるお父さん
いつも家族の柱となって
がんばってくれて
ありがとう

「熊本県子どものポエムコンクール」優良賞受賞!!

毎年、１年生の国語の授業で取り組んでいる家族への想いを詩で表現する学習活動。今年も子ども達からたくさんの詩が生まれました。その中で１年１組の笹原弥沙紀さんの詩が優良賞に選ばれました。

「命をもらって生きている」

阿蘇北中学校三年
伊藤竜太朗

少し寒い夜、僕が懐中電灯を照らしていたら、「ドサッ」と、大きな何かが落ちる音がした。僕は強張っていた顔をパーッと輝かせてそれを見た。

「おー、生まれたばい！子牛が生まれたばい！」

そう、今日は牛の出産の日だったのだ。僕は初めてそこに立ち会い、少し興奮気味だった。父が今にも出てきそうな子牛の足を引っ張り無事生まれてきたのがこの子牛だ。名は母がつけて、「勝男」となった。子牛は寒さに弱い。だから、寒さに負けず元気に育ってほしいと思った。

次の日、学校から帰ってくると、親牛と子牛が別々の囲いの中にいた。母牛が子牛に乳を与えないので、人工で育てることになったということだった。僕は勝男がかわいそうで仕方なかった。親からの愛情をもらえずに生きていかなければならない勝男はとても辛いと思う。だけどその代わりに僕達が親となり育てていこうと強く思った。

その日から僕は勝男に粉ミルクを飲ませ始めた。夏休みに入るとほとんど毎日ミルクを飲ませた。勝男は僕がミルクを持ってくると「早くくれ」と言わんばかりに動いてまわり、「ンメェー」と鳴くのだ。飲む時も力強く容器を引っ張ってくる。こっちもそれ相応の力を腕に入れておかないといけなかった。しかし、勝男のためなら苦ではなかった。

勝男が生まれて二年が経った。勝男は立派に成長し、家畜市場に出されることになった。

朝、僕が学校の支度をして外へ出ると、トラックの後ろに勝男がいた。僕の心は複雑だった。「勝男は食肉になるのか。」「勝男は殺されて食べられてしまうのか」と。

勝男はいつものように穏やかな顔をしてトラックの上に立っていた。僕は悲しい気持ちを抑えつつ、心の中で「さよなら」と一言つぶやき学校へ向かった。

ある日、テレビを見ていると、宮崎の牛から口蹄疫という病気が見つかったというニュースがあっていた。最初は何気なく見ていたが、十ｋｍ以内の牛約二十万頭が殺処分決定と聞いてとても驚いた。僕は勝男の誕生の時を思い出した。処分される二十万頭の牛達も勝男と同じように生を受け、みんなに見守られながら生まれてきたはずなのに、なぜこうも違うのだろうか。

また、ニュースでは「口蹄疫は人間には感染せず、食べても人体には影響ない」とも言っていた。しかし、次に出た肉料理店のインタビューでは、「当店では安全な肉を使用しているので安心して召し上がれます」という店員の言葉があった。これを聞いて僕は激しい怒りがこみ上げてきた。正しい知識も持たず、あたかも知っているかのように振る舞う姿は、僕にとって衝撃的だった。「これでは二十万頭もの牛達に失礼ではないか。」「牛達はどんな思いで死んでいくんだ」殺され捨てられるのではなく、口蹄疫に関する正しい知識を持った上で、少しでも食べてもらえれば、牛も本望だと思う。僕は、二十万頭の牛達が、僕達の体の一部となり、その中で生きてほしいと思った。

僕は子牛を育てたことと口蹄疫の問題から学んだことがある。それは、「僕達は命をもらって生きている」ということだ。そんなの知っていると思う人も多いだろう。しかし、この言葉の意味を考えたことがあるだろうか。僕は考えてみて少し分かった気がする。

「食物連鎖」これが全てを物語っている。三角形のピラミッドから一つの種属が消えたとすると、それだけで僕達はこの世に生き続けることができなくなる。だから僕達は正しい知識を身につけ、一つ一つの命を大事にして、これからを生きていくことが求められているのだ。